

平城宮東院地区の調査（平城第 381 次）

現在、平城宮跡発掘調査部では、平城宮の東に張り出す東院地区を発掘しています。奈良時代後半の文献史料には「東院」や「東宮」に関する記載がしばしば登場します。「東院」は、皇太子あるいは天皇が住む場所であったとともに、さまざまな儀式や宴会などがとりおこなわれた場所です。

復原された東院庭園は、東院地区の南よりに位置します。庭園を中心にした南側部分は、発掘調査によって区画施設や建物などが見つっていますが、北側部分については、よくわかりません。『続日本紀』に記載されているような「東院玉殿」などの中枢建物は、庭園の北側に存在すると考えられています。

東院地区は 1960 年代以来、西辺を中心に発掘調査が継続的におこなわれてきました。現在、東院庭園にむかう南北の宮内道路が通っていますが、その部分の調査でも井戸や建物などの遺構が密集していました。とくに 1999 年度に宮内道路の東側でおこなれた第 292 次調査では、大規模な建物が見つかりました。規模の大きさと、すべての柱筋の交点に柱がある総柱そうばしらの構造であることから、東院の楼閣宮殿と呼ばれています。この時の調査で総柱建物が北に続くことを確認しました。今回は楼閣宮殿の全容を解明するため、その北側を調査しています。

調査は平成 17 年 1 月からはじめました。東側には北から宇奈多理神社にむかってのびる丘陵、西側は水上池からつづく谷地形であるため、今回の調査区は東が高く、西が低い緩傾斜面となっています。

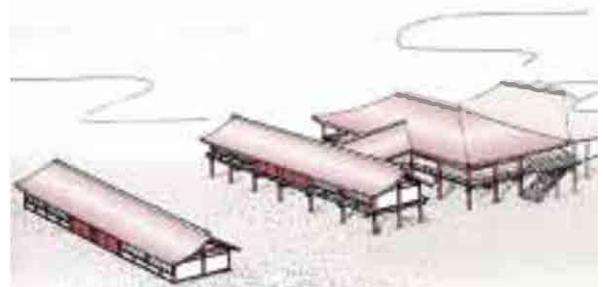
耕作土を掘り下げると、すぐに重複する多くの柱穴を発見しました。検出面はおおむね地山ですが、東側の高い一部に奈良時代の整地土が残っていました。現在は奈良時代の遺構面の精査をすすめているところです。遺構の解釈については、まだ明らかでない点も多いのですが、南側の第 292 次調査で見つかった主殿と考えられる建物の規模が、当時の所見よりも北に伸びる可能性が高いこと、その北側に同じか、あるいはそれ以上の規模の後殿とみられる総柱建物があることがわかりました。また、この建物（後殿）は南側の建物（主殿）同様、同じ場所で建て替えられていることもわかりました。

そのほかにも、塀や建物の一部とみられる、たくさんの掘立柱が見つっています。周辺の調査でも、東院地区は奈良時代から平安時代初頭にかけて、大規模な建物が何度も建て替えられたことがわかっています。このことは、とくに奈良時代後半、「東院」が平城宮のなかでも、重要な場所のひとつであったことを示しています。今回の調査も、それを改めて確認する調査となりました。

（平城宮跡発掘調査部 神野 恵）



第 381 次調査区の位置（赤色部分）



東院楼閣宮殿のイメージ（年報 1999-Ⅲより）



発掘調査の作業風景（北から）